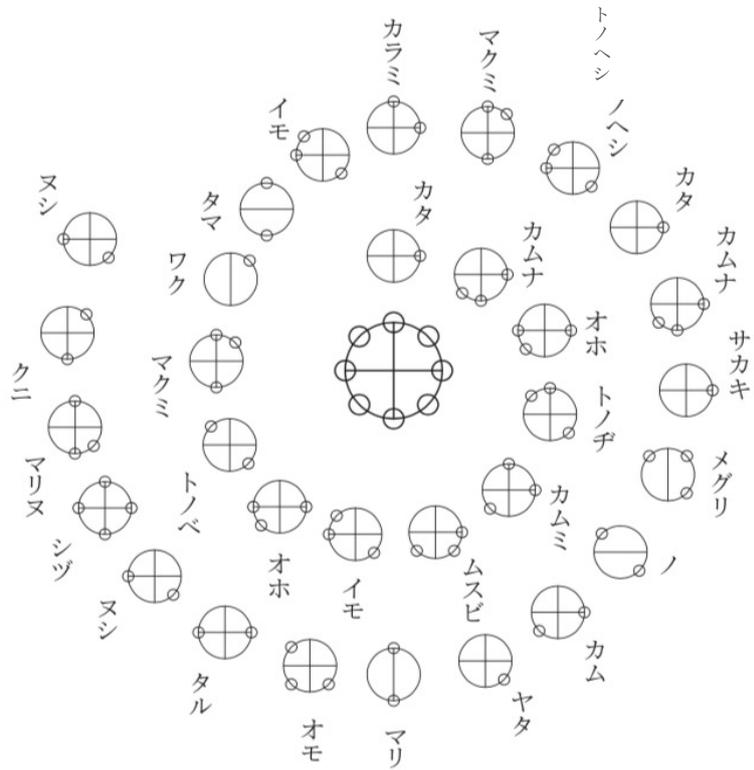


第三十一首



カタカムナ
 オホトノヂ
 カムミムスビ
 イモオホトノベ
 マクミワクタマ
 イモカラミ
 マクミトノヘシ
 カタカムナ
 サカキメグリノ
 カムヤタマリ
 オモタルヌシ
 シヅマリヌ
 クニヌシ

・第三十一首解説

カタカムナ（潜象根源から独立したカムナ）は、六方環境（オ）の親和（ホ）重合（ト）変遷（ノ）の持続（チ）によって、潜象粒子（カムミ）を発生（ムス）する根源（ヒ）である。極微粒子（イ）が連なり集合（モ）し、六方環境（オ）の親和（ホ）重合（ト）変遷（ノ）の方向性（ベ）をもつ。

磁氣的素量（マクミ）を発生する（ワク）粒子（タマ）であり、極微粒子（イ）がクモ（モ）のように連なり、渦が起こり素量となる（カラミ）。

磁氣的素量（マクミ）の重合（ト）変遷（ノ）の方向性（ヘ）を示す（シ）。

生命から独立したカムナである（カタカムナ）。

正反の逆（サカ）に発現（キ）発生（メ）し、自由に（ク）別れ（リ）変遷し、潜象（カム）の極限（ヤ）まで独立した（タ）現象粒子（マリ）となる。

六方環境（オ）の雲のように（モ）現れて独立的（タ）に存在（ル）する目に見えない（ム）示し（シ）。

示された（シ）個々（ツ）の目に見えない（ヌ）マリであり、自由（ク）に定着（ニ）された目に見えない（ヌ）示し（シ）

生命の発生（カムミ ムス）という物理を我々現代人の科学は、電子・原子・分子・細胞などの現象の極微粒子の次元で考えているが、カタカムナ人はその現象（アマ）の極微粒子が、潜象（カム）の変遷であることを直感し、その現象極微の粒子（イモ カラミ マクミ トノヘシ）が、どうして発生し、存在を持続しうるか？（オホトノチ オホトノベ）の物理を示しているのである。このカタカムナ人の思想は、確実な現象と潜象のサトリである。電気と磁気は常に伴って発生することを示している。この電気に伴って発生する様々な電気現象は潜象のアマナの質量が原子核として存在するからである。潜象物理。

オホトノチ：六方環境の親和重合の変遷の持続

オホトノヘ：六方環境の親和重合の変遷の方向性を持つ

・第三十二首解説

アマノカミ アメノヨロツ クナギノタマワケ

「アマノ（潜象の）「カ」の「ミ」が、アマノ（現象の）ヨロツのタナギ（粒子）になって発生するのは、そのカミがアマナ（アヤクメシコネ）のカムミツとして、シツマリ（定着）することによってタマワケされるからである。」という生命発生の原理を述べている。

「アヤクメシコネ」とは、アヤ（客観背後）のク（自由に）メ（発生する）示しの（シ）の繰り返しの（コ）根（ネ）、つまり「アマナ」のこと（第三十一種オモダルヌシと同意）

「タマワケ」はカからタしたマであり、アマもタマであるが、タマワケされたももタマである。タマの実質は「カ」の「ミ」である。タマワケされたタマの中心（ヒ）根源（ネ）にあるものは「カ」の「ミ」、すなわち、目には見えない「アマナ」（目には見えぬヌシ（カミのシメシ））

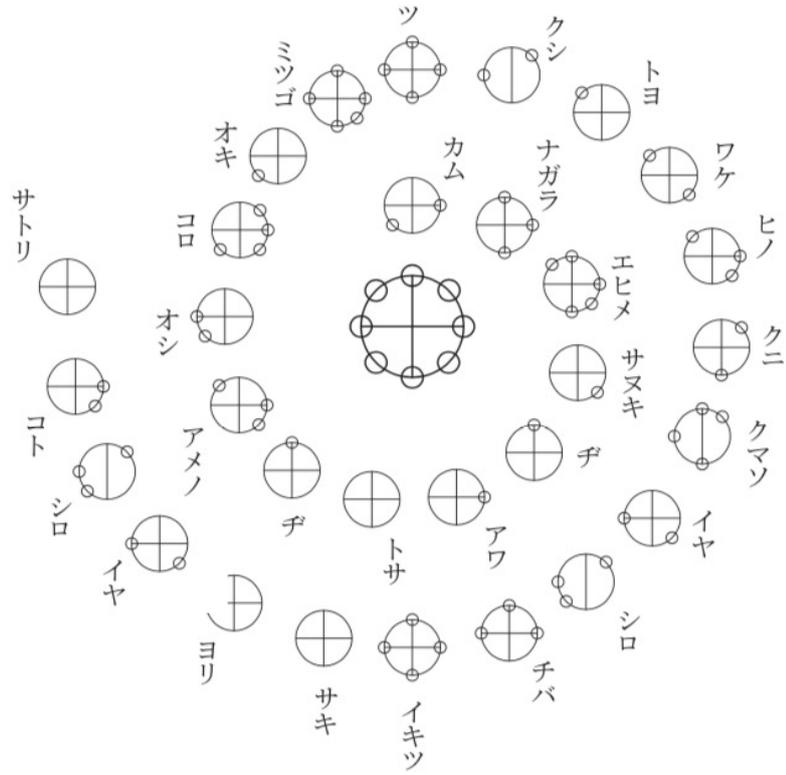
「イツノタテカム アワナギカサネ」とは、現象極微粒子（イ）の個々（ツ）が変遷（ノ）して出て正反にあらわれ（タテ）潜象（カム）のアワの粒子（ナギ）が、カのサの根（ネ）に重ねられてという思念。

「アワナギ」とは、アワの粒子（ナギ）、アワとは「カ」が現象にでると「アワ」になる。カムから次々と発生してウツされる粒子の生命力。

「アサチノ ホノサワケシマ イヨノイヤシロチ」とは、イツノタテしたものは、そのカム（カムツミ）のアワナギを重ねた根（カサネ）現象粒子（ア）の正反（ハ）に持続（チ）して次々と受け継がれ（ノ）、親和重合（ホ）の変遷（ノ）の「サ」にワケられたウツメのシマとして、電気粒子の（イ）正反四艘（ヨ）の変遷（ノ）の電気粒子（イ）が極限（ヤ）までに豊富に示されて（シ）あらわれる（ロ）場を持続（チ）するチカラとなる。

我々の生命は「イ」の変遷（ノ）持続（チ）であって、「イ」が活性に持続されれば「イヤシロ」（健康体）で生きられるのである。

第三十三首



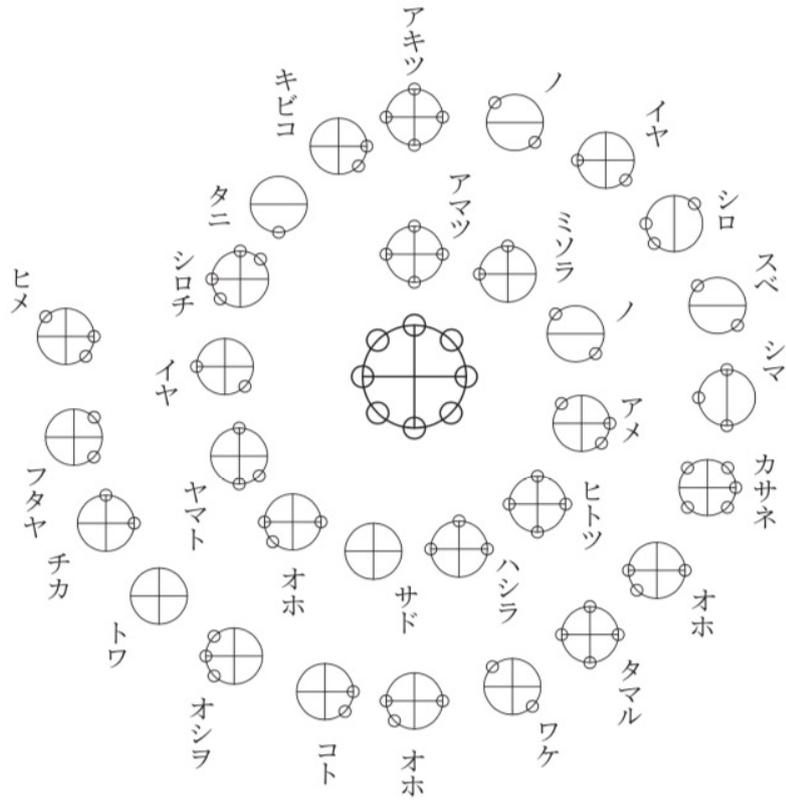
カムナガラ
 エヒメサヌキチ
 アワトサチ
 アメノオシコロ
 オキミツゴ
 ツクシトヨワケ
 ヒノクニクマン
 イヤシロチハ
 イキチサキヨリ
 イヤシロコトサトリ

・第三十三首解説

「カムナガラ」カムが何回も「カ」からあらわれて
「エヒメサヌキヂ」エ（映し出された）にヒメられたサヌキ（差によって潜象から発生（キ）するチカラのチ（持続）と、
「アワトサヂ」アワ（存在するもの、すなわちサヌキに合わせるチカラ）の ト（重合）するサ（カムの量）のヂ（持続））によって、
「アメノオシコロ」アからメしたものの変遷（ノ）の六方に（オ）示された（シ）繰り返し（コ）オクから正反にあらわされる（ロ）小粒子が、
「オキミツゴ」六方（オ）から発現し（キ）ミツゴ（ミの個々の繰り返しのマリ）になり、
「ツクシトヨワケ」個々（ツ）の自由（ク）な示しの（シ）重合の四艘（トヨ）にワケられて
「ヒノクニクマソ」核（ヒ）から変遷（ノ）して自由に（ク）定着した（ニ）個体の物質系と、自由に（ク）個体（マ）から外に出る（ソ）チカラがある。
ヒノクニとは、現象、すなわち、原子、分子、細胞が構成するものを指し、クマソとは、その物質から自由にマに出される勢力系のもの、つまり、電磁波と言える。
「イヤシロチバ」電気（イ）が極限まで（ヤ）示された（シ）あらわれ（ロ）の持続（チ）の、正反のバランスの場（バ）がつくられる。
「イキツサキヨリ」生きているあらゆるもの（イキツ）が、サによって発生し（キ）四相に分かれて（ヨリ：寄り添って）存在する。
「イヤシロコトサトリ」健全な生命の（イヤシロ）繰り返し（コト）のサトリである。

※「カムナガラ」という言葉は、ウタヒ80首の中に41回も出てくる。カム（潜象のチカラ）何回（ナ）もカからあらわれる（ラ）という思念。カムウツシ、アマウツシの発生で生命が持続されていることのマクラコトバと解釈されている。カタカムナ人は大事な基本の捉え方を伝えたかったと思われる。

第三十四首



アマツミソラノ
 アメヒトツハシラ
 サドオホヤマト
 イヤシロチ
 タニキビコ
 アキツノイヤシロスベ
 シマカサネ
 オホタマルワケ
 オホコトオシラ
 トワチカ フタヤヒメ

・第三十四首解説

「アマツミソラ」カムが現象にでたアマの始元量のツ（個々）のミ（微分粒子）がソ（そのまま、ここでは現象空間）にラ（あらわれて）してノ（変遷）し

「アメヒトツハシラ」アマからメ（芽）の出た、つまりあらゆるものの発生の最初の芽は、ヒ（核）がト（統合）されたツ

（個々）であって、ハシラ（正反に示されてあらわされる）である。アマ始元量のヒトツヒトツが正反をもってあらわれているということ。

「サトオホヤマトイヤシロチ」サ（微分性）ト（統合性）は、サによって、分化、分裂、微分し、重合、統合、和合されること。オ（六方環境）からホ（親和重合する）スガタ。ヤ（極限）までマにト（統合）される。

イ（電気粒子）がヤ（極限）までシ（示されて）ロ（露われる）状態がヂ（持続）している。

「タニキビコ アキツノイヤシロスベ」カからタ（分かれて）ニ（定着した）キヒコ（発生がヒから繰り返される）ア（現象に）キ（発生した）ツ（個々）がノ（変遷）する。

イ（イノチが）ヤ（極限まで）シ（示されて）ロ（あらわれる）ス（進行）へ（方向）。

「シマカサネ オホタマルワケ」シ（示された）マ（微粒子空間）にカのサのネがある。重ね。量（カサ）の根。

オホタマルは、オホ（六法環境の親和重合）によってタ（分かれて）マにル（とどまる）、すなわち、広くカムアマから発生した現象物、宇宙の万物万象、生命体。

オホタマルワケとは、その所以、全体から分けられた（ワケ）ものということ。

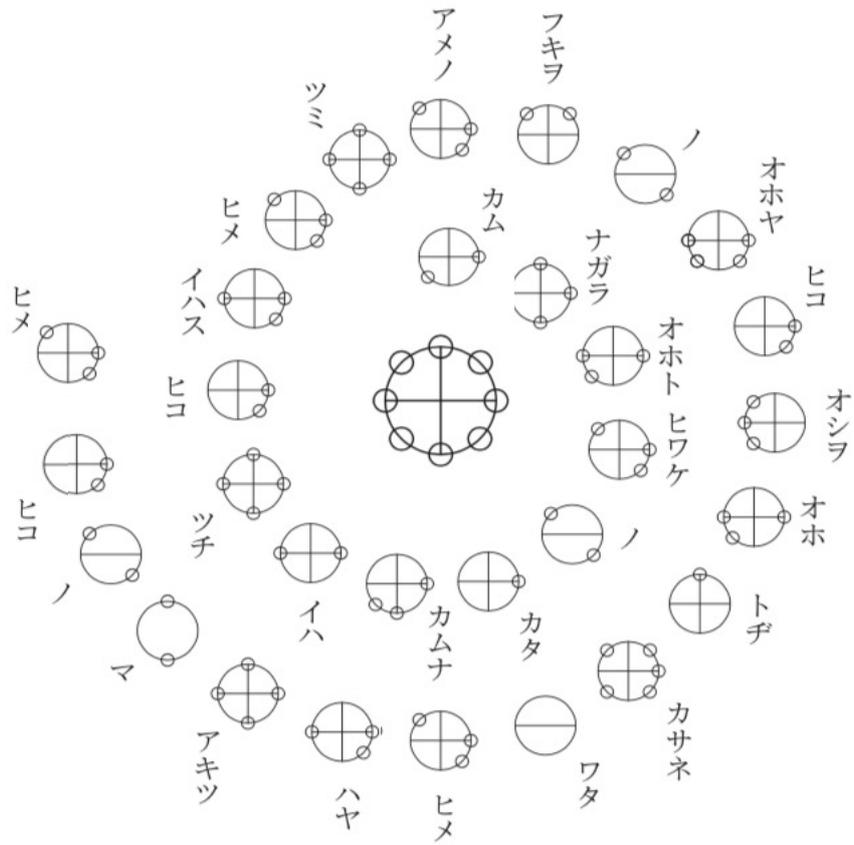
「オホコトオシヲ トワチカフタヤヒメ」オ（六方環境）からホ（重合統合）がコト（繰り返され）オ（六方環境）からシ（示されて）ヲ（四相性をもって発現したもの）

トワとはト（統合、重合）ワ（和）なので、全体の和のための統合、自然との統合だが、また自由に分けたりマトめたりして転換しうるものだという思念。チ（持続的な）カ（根源）

フタヤ（極限まで進む正反エネルギー）をヒメている。

※「オホ」は自分の生み出した生命が、現実の場で、どのように変遷し変化しようとも、「ヤ」まで「オホ コト」（カカワリ）し通して、その生命体（オシヲ）養い、守り、最後まで生かそうとしているものである。それゆえ、「オホ」の示す方向にスナオにのっていけば、アタリマエのこととして健康生命を全うして（イヤシロに）いきられるのだ。

第三十五首



カムナガラ
 オホトヒワケノ
 カタカムナ
 イハツチヒコ
 イハスヒメツミ
 アメノフキヲノ
 オホヤヒコオシヲ
 オホトヂカサネ
 ワタヒメ
 ハヤアキツ
 マノヒコヒメ

・第三十五首解説

「カムナガラ」潜象のサトリですが、
「オホトヒワケノ カタカムナ」六方環境（オ）からホト（親和重合）によって、カムのヒ（根源）からワケられてノ（変遷した）カタカムナ（個々に存在させている個体の生命のヌシ）である。

「イハツチヒコ」イ（生命を構成する最小単位の電気粒子）のハ（正反の）ツ（個々の）のチ（持続）のヒコ（根源の繰り返し）である。

「イハスヒメツミ」イハス（電気粒子の正反が進行する方向性）をヒのメ（芽）としてもつつ（個々の）ミである。すなわち、全ての生命をよりよく生かそうとする天然の方向性をもっているということ。

「アメノフキヲノ」アメノフキヲとは、カムから変遷した（ノ）アメの二つの（フ）発生（キ）四相（ヲ）をもつものという思念。二つのキとは正反、サヌキ、アワとして発生するものである。「ヲ」は四相をもって湧出する思念。

「オホヤヒコオシヲ」は、アメノフキヲがノ（変遷して）オホがやまでヒコされてオシヲになるという思念。ここでいうオシヲは六方環境から立体化して四相を持って存在するもの、つまり原子、分子の状態。

「オホトチカサネワタヒメ」オホの統合の持続を重ね、ワ（和）するサガとタ（分離）するサガをヒメる（秘める）。

「ハヤアキツマノヒコヒメ」正反のやまで（ハヤ）現象に発生した（アキ）個々（ツ）となることで、それは、マのノ（変遷）のヒコ（現象化）であり、そのヒを発生するメをヒメているのである。

細胞の核内のDNA遺伝子の情報のことであろうと推測される。